子どもから大人、若者から高齢者に至るまでのすべての人の文化を

文化高知

2008年5月　NO.143

「opus」島村　悠

〈もくじ〉

高知文学学校五〇年をこえて……猪野　睦　2
高知種畜牧場の思い出……永野哲也　3
第18回高知出版学術賞を審査して……中内光昭　4～5
パガニーニ合奏団のこと……山岡耕筰　6～7
木造アーケード完成から十年経過して……山本良喜　8～9
地の名も無き偉人たち⑨　新国劇の創始者―沢田正二郎―……広谷喜十郎　10
言葉の現場から⑨　雨よ降れ　大地に降れ……岩井信子　11
高知のギャラリー⑤　喫茶のんた……朝比奈富美男　12
３月の事業のご報告……13
風俗歳時記・風伯……14～15

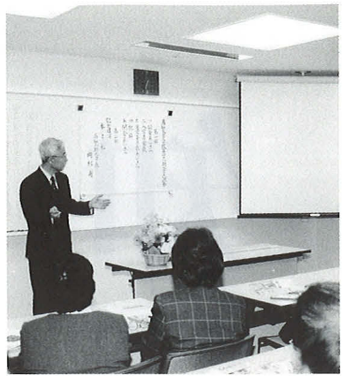
(財) 高知市文化振興事業団

高知文学学校 五〇年をこえて

猪野　睦

年月の流れは早い。高知文学学校が創立五〇周年を祝ったのは、昨年の十二月二日だった。創立募集にあたっての呼びかけには次の一文があった。

「高知に文学の土壌を培い、人間と社会の真実と美を高く謳った香り高い文学を、この高知の土地からつぎつぎと生みだしたいものです」。「文学同好の志よ、高知文学学校のメンバーに加わって下さい」。五〇年前の十一月だった。



この呼びかけに応じて募集定員の倍をこす老若男女が集まった。一期がすむと間をおかず二期三期と連続開講という盛況であった。戦後十二年をへて高知でも文化要求が高まっていた時代であり、その波のなかのスタートだった。

当時は全国でも文学学校が続出していた。だがやがて下火となり、いつのまにか消えていき、いまでは高知と大阪のみとなった。なぜ三〇万都市の高知で続いているのか。それを高知の不思議のひとつと言う人もいる。

半世紀にわたる文学学校は楽々という訳ではなかった。受講料を確保し、それで自立運営をしていく。いわば財政的には日銭暮らしであったが多くの人のあたたかな眼に励まされ今日に続いてきた年月であった。

定員六〇名、三月なかば開講、七月末終了まで毎週木曜の夜間講義があり、その間、文学のあらましを修得できる講義編成を続けてきた。修了後は研究科に加わり、作品をかき仲間が拡がっていくが、ピクニック、キャンプ、忘年会その他のにぎやかな行事のなかで学校づくりが続いてきた。

講師の参加も一五〇名をこえたが、ほとんどボランティアといっていい協力で、熱気をこめてわが文学を語ってくれた。その熱気がまた受講生に伝わっていく年月だった。

そして根城となる教室も、いま緑地になっている高知城下にあった高知市立中央公民館木造別館から始まり、県民文化ホール内公民館へ、そして現在のかるぽーとを"わが教室"としてきたことも、継続への大きな寄与であった。

西村時衛運営委員長時代が三〇年続き、あと岡林清水運営委員長時代が十年続くが、この四〇年間は、じっくり時間をかけて文学学校の伝統をつくりあげてきた期間でもあった。

さて文学学校はなにをつくりあげてきたのか。これまで三六〇〇人もの人々が巣立ってきているが、この人たちは眼にみえない文化力を高知に生みだしてきているのではあるまいか。文学を通じて世の中を見、香り高い文学を生みだしている営為はくかとともに検討課題となってきている。

募集要綱をだすだけで人の集まる時代ではなくなっている。インターネット時代にふさわしい呼びかけも必要になってきている。五〇年をこえて新たに活力のある文学学校のメンバーに加わってくれる人の多いことを願っている。

（いのむつし／高知文学学校運営委員長）

はかり知れない文化貢献といっていいのではあるまいか。

順調にみえてきた文学学校も、近年は時代の変化、文化の変容、文学の拡散化などのなかで、新しい時代に合った対応を迫られているといってもいい。外部条件としても昼間の文化講座などのなかでの夜間講義の工夫なども、時代にどう対応してい

高知種畜牧場の思い出

永野哲也

私の故郷は、旧香美郡片地村、現在の香美市土佐山田町で、進学のため、その故郷を離れてからもう六十年近くになる。そんな長い年月が経ったのか、改めて驚いている。大学を卒業し、四国へ帰ってきて、四国電力に就職したが、高知に住んだのはわずか一年間のみで、ほとんどを高松市に居住してきた。しかし、故郷へは、両親が健在であった頃も、現在も、年に数回は帰省しているため、故郷は遠くにありて思うものとは違って、故郷は常に近くにあるという感じである。

故郷での幼い頃の思い出は、何といっても現在、鏡野公園と高知工科大学となっている旧農林省高知種畜牧場である。ここは戦時中は優秀な軍馬の育成のための牧場で、約二百万平方メートルという広大な土地で、当時は事務棟を中心に、厩舎、大小の馬場、牧草地、官舎等がゆったりと配置され、その周囲には、今も桜の名所として有名になっている桜をはじめとする、いろいろな木が数百本も植えられていて、美しい公園といったところであった。

小学校五年生の頃だったと思うが、新しい場長さんが着任され、そのご子息さんが同級生として転校してこられた。中松君といい、都会育ちの礼儀正しい、大人しい方であったが、早々に田舎暮らしにもなじんでくれて、私たちは共に広い牧場のあちこちで元気いっぱい遊んだものだった。牧場の馬は、優秀な軍馬を繁殖させるための雄の馬で、それまで荷馬車をひく馬しか見たことのなかった私たちにとっては、とても大きく感じられ、その気品のある美しい姿には大変驚いたものであった。

中学に入ってからも、休日にはよく牧場に遊びに行っていた。なかなか近寄り難い雰囲気の馬たちではあったが、三年生の頃、思い切って係の人に馬に乗ってみたいとお願いをしたところ、すぐに承諾してくださった。そして立派な体格の馬を馬場に連れ出してきてくれた。いつも見慣れていた馬だったが、いざ乗るとなると本当のところ怖さ八分、嬉しさ二分という気持ちであった。

馬に跨ってみると、予想していた以上に馬の背は高く、しかも背中が広く太く、今想像してみると、ちょうどお人形さんがチョコンと座っているような恥ずかしい姿だっただろうと思う。それから何度か指導を受け、練習を重ねているうちに、少しずつ馬との心の交流もできてきたのか、ようやく一人で馬場の中を自由に駆けることができるようになった。嬉しさのあまり、ひとりで昔の武士の姿を思い浮かべながら得意がっていた。

緑の中に広がる高知工科大学キャンパス

終戦により、思い出深い牧場は閉鎖され、中松君とも馬ともお別れした。そして平成の時代となり、その跡地が高知工科大学と公園に生まれ変わった。私にとっても、なつかしい少年時代の思い出の地が、昔の面影を残しながら新しい時代に即した施設になったことを心から喜んでいる。

今後は、大学は先端技術における世界への発信基地として、また公園は、かつての牧場の面影を残しつつ、桜の名所としていつまでも人々から愛され親しまれ続けることをこころから願ってやまない。

（ながのてつや／四国電力株式会社顧問）

第18回
高知出版学術賞を審査して

中内光昭

十八回を迎えた高知出版学術賞の推薦点数は二十三点で、昨年の二十一点、一昨年の十四点に比べると、着実に増加している。研究分野は、人間科学関係六、社会科学関係七、自然科学関係八（うち、医科学関係二）、複数分野二で、ほぼバランスがとれていた。

審査は八名の審査員によって行われた。冒頭、推薦書籍のうち、一冊の、極めて専門的な英文の学術書が、本賞にふさわしいか、どうかをめぐって、意見が交わされ、その結果、本賞の性格について、およそ次のような共通の見解が得られた。

募集要綱によると、本賞は「優れた学術研究が、地域の文化の向上にとって極めて重要であることから、これの振興を図る」目的で設けられ、「対象」とされるのは、学術的著述とされている。

主催の高知市文化振興事業団の性格から考えて、本賞が目指しているのは、優れた学術的著述を通じての高知の文化の向上であり、市民の教養の向上であると考えられる。つまり、学術研究の成果そのものを顕彰するのではなく、その成果を出版という形で、理解しやすい形で市民に提供し、それにより市民の教養が高められることを期待していると考えられる。この観点からすると、本賞にふさわしい著述は、一般市民が理解でき、一般市民の教養を高めることが期待できるものでなくてはならない。従って、一般市民が理解できない、高度の純学術書等は本賞の対象外である、という見解である。

第一回の審査委員会で七点を選び、それらを精読後、第二回の委員会で次の三点を選んだ。三点に序列はついていない。

高橋昌明著
『歴史家の遠めがね・虫めがね』
角川学芸出版刊（二二三ページ）

本書は、高校卒業まで高知で育った著者が、高知新聞に連載の歴史エッセイを補筆したもので、歴史上の多くのトピックスを、従来の史観にとらわれない自由な目で、様々な角度から、巨視的、微視的に見る時に、浮かび上がってくる、思いがけぬ発見を興味深く解説している。

著者は、「歴史とは、現代を相対化し、人類史上の特異性、一過性に、冷静な観察の目を向けることを可能にする知的な営み」と位置付け、本書の基本的なねらいは、「歴史を通して、近代・現代とは、人間たちにとってどういう社会か、に思いをめぐらせてもらうことにある」としているが、本書において、著者の意図は見事に成功していると言える。

話題は自由奔放、時間、数値、言葉から戦争、科学、産業、さらには、居酒屋、食べ物まで、土佐とも関連させながら、多彩な話題で読者を歴史の世界に引き込んでゆく。

多くの事実や考え方が、無駄のない文体で、分かりやすく解説されていて、先入観にとらわれない、素直な目で、歴史を覗く時に見えてくる「作られた歴史」のうさん臭さに読者は新鮮な刺激を受ける。

いわば、歴史の「裏通り」から、歴史の本通りの真実を見抜く術を示す、優れた学術的随筆として高く評価された。筆者は神戸大学大学院人文学研究科教授（本年三月退官）である。

掛水雅彦著
『幻の鶏　土佐ジロー20歳
スーパーブランドへの軌跡』
高知新聞社刊（一四四ページ）

高知新聞編集委員の著者が、二〇〇六年に、高知新聞に連載したルポルタージュに加筆、修正したものである。

土佐ジローは、高知県畜産試験場（平岡英一さん）が、土佐地鶏（♂）とロードアイランドレッド（♀）をかけ合わせて作出した高知特産の鶏で、卵や雄肉の味で全国的に極めて高い評価を受けている。

二十年前に誕生したこの『品種』が、さまざまな危機（病気、飼育失敗、知名度不足、営業不振、飼育農家のわがまま・手抜き等）を、関係者の懸命の努力や幸運により、奇跡的に乗り越えて、全国ブランドとして認められるまでの苦難の道のりを丁寧に取材、記録したものである。

新聞記者らしく、淡々と、冷静、客観的に事実を記録しているが、それゆえに、迫力があり、感動的である。読み易く、めりはりが効いており、コンパクトにまとめられている。

いわゆる「学術書」ではないが、内容は貴重な歴史的記録であり、参考資料としての価値が高い。

新製品の「開発、作成、販売、PR、賞味、評価」を軸に多数の関係者に直接取材し、記録した態度は、敬服に値する。ルポルタージュの作法として模範的である。

澤村榮一著
『ケルトふたたび
―新生アイルランドをめぐって―』
南の風社刊（二一〇ページ）

一九九七年に筆者が高知新聞に連載した「ケルトの周辺」の続編として、同紙に連載された（〇一―〇二年）もので、主に、アイルランド文化に焦点があてられている。

膨大な資料と幅広い「雑学」を背景にした、異色のケルト紹介書である。自由洒脱な文体で、一気に読ませる力を持っている。絶えず脱線しながらも、程よく本題に立ち戻る、遠心力と求心力のバランスが心地よい。

著者は、「〈昭和〉という時代のあれこれを回想しながら、自分史をつづり、そのような回想が、いつしか、ケルトやアイルランドと結びつく。その間、常に、ケルト・アイルランド文化という鏡に写して、日本文化・土佐文化の特質を浮き彫りにする――という手法をとった」と述べている。

この特異な手法により、ケルト文化と土佐の文化を巧みに交差させながら、読者をケルトの世界に誘い込む。題材は、言葉、文学、音楽、映画、民俗、気質、酒など、気の向くままに展開されるが、それらの問題が、アイヌや琉球、さらには、日本統治下の朝鮮の問題などとも関連することに読者は気付かされる。

密度の高い、学術的な読み物として、多くの審査委員から評価された。著者は高知大学名誉教授である。

これら三点と共に、最後まで候補に残った作品に、是永かな子著「スウェーデンにおける統一学校構想と補助学級改革の研究」（風間書房）がある。

著者の博士論文に加筆したもので、長期にわたる現地での研究や膨大な一次資料の解析に基づいており、ユニークかつ精力的な研究と評価された。本研究の対象である「排除される者のない」学校教育の問題は、研究者だけでなく、一般の人にとっても大きな関心事である。ただ、本書の記述は理解しにくく、「市民の教養」の書としてはもう一段の工夫が必要であるとの評価を受けた。

（なかうちみつあき／高知大学元学長）

「歴史家の遠めがね・虫めがね」

「幻の鶏　土佐ジロー20歳
スーパーブランドへの軌跡」

「ケルトふたたび
―新生アイルランドをめぐって―」

パガニーニ合奏団のこと

山岡耕筰

東京芸術大学在職中は、毎年、年度末に実技の卒業試験を聴かなければならなかった。

それは大変苦労な仕事ではあったが、楽しみでもあった。卒業生の中に、ピカッと光るものを持っている学生が必ず一人や二人、多いときには三人も四人もいるからである。私はそのような学生の演奏を聴く度に、このような優秀な人物ばかりを集めて合奏をさせたら、さぞかしよいものができるだろうと思った。しかし彼等は卒業後はどこへ行ってしまうのか、その消息はまったく途絶えてしまうのである。「もったいなことだ」と思いながらも、在職中は校務に追われて何もできなかった。

芸大の卒業生に限ったことではない。毎年各地で行われているコンクールなどでも、上位に入賞したり入選したりする若者は、やはり"ピカリ"と光るものを持っているのである。彼らはコンクールの直後こそ、いろいろともてはやされるが、月日が経つにしたがって忘れられてしまう。

ある時、私は図書館で何気なく、音楽雑誌のページをめくっていた。すると「日本列島プロ・オケ（プロフェッショナル・オーケストラのこと）マップ」……このタイトルが本当に正確かどうかは保証の限りではないが……という白地図があって、その中にプロ・オケの所在が、黒い丸で点々と示されていた。

ところがわが郷里―四国の島には黒い点が一つもないではないか―。

他の島には―小さい沖縄の島にさえ、黒い点があるのに―。

これはいかん。宮崎県の東国原知事さんではないが"どげんかせんといかん"と思った。

何とかして四国の島に一つプロオケができないだろうか？　四つの県が力を合わせれば何とかなるのではなかろうか？

それ以来私は、四国のプロ・オケ実現話を親しい人達に話し続けた。

私の話に反対する人は一人もいない。しかし「実現可能か」ということになると、誰一人首を縦に振る人はいなかった。むしろ一笑に付されることが多かった。しかし私の体には"イゴッソー"の血が流れている。ネガティブなことを言われれば言われるほど、ムキになって、四国プロ・オケ必要論を説いたが、あまりにも金がかかりすぎる。

道路一本つくるのをやめればできるかもしれないが、道路も大切である。私はうなだれるしかなかった。

そのようなとき、私の出身地である宿毛の方から「何かやらんか」という声が聞こえてきた。

「さあ、何ができるだろうか」

「何をすればよいか」

あれこれ考えた末、

「よし、オーケストラはできないが、その原型となる弦楽合奏をやろう」と思った。

冒頭で述べたように、若い人達の中に、優れたプレーヤーはたくさんいるのである。すでに非常に優れたプレーヤーの何名かは私と一緒に演奏活動をしている。それに少人数の優秀なプレーヤーをプラスすれば、よい合奏団をつくることは難しいことではない。「これだ」と膝をたたいた。

宿毛市だけで演奏会を開くのでは物足りないので、高知市に話をしたら、高知市でも"よろしい"ということになり、さらに土佐清水市に持ちかけたら"OK"ということになった。

日程は次のとおりである。

六月二十日
高知市文化プラザかるぽーと

六月二十一日
宿毛市総合社会福祉センター

六月二十二日
土佐清水市立市民文化会館

プログラムは、

1　カプリス　第二十一番（恋心）
パガニーニ作曲

2　リュートのための古風な舞曲とアリア　レスピーギ編曲

3　童謡　ふるさと
赤とんぼ
七つの子
手のひらを太陽に

―休憩―

4　四季（全曲）　ヴィヴァルディ作曲

私は若い頃から弦楽合奏とは縁が深い。

大学在学中から合奏団をつくって演奏旅行などをした。

大学卒業後には「ヴィヴァルディ合奏団」を結成した。私は留学のためにこの楽団を離れたが、楽団は今も活動を続けている。

さて、「パガニーニ合奏団」のことだが、この名前は言うまでもなくヴァイオリニスト、パガニーニの名前を借りたものである。しかしただ借りただけではない。演奏会の度に必ず彼の曲を一曲プログラムに入れるという意味を含んでいる。

歴史上空前絶後の天才といわれた彼の作品は、合奏曲に編曲をしても、かなり難しい。しかしわれわれは、果敢にも挑んでいく。

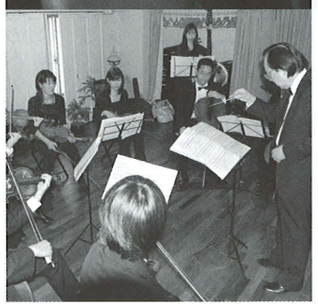
かつて、テレビコマーシャルで"上を目指すのじゃ"というのがあった。あの精神である。そして日本一の合奏団にしたいと思っている。

"言うたちいかんちや　おらんくの池にゃ　潮吹く魚が泳ぎよる"と大袈裟な表現をする土佐人の気質が、私の血の中にも流れているのである。

（やまおかこうさく／東京芸術大学名誉教授）

山岡耕筰　プロフィール

宿毛市出身。東京芸術大学専攻科（現大学院）修了。ドイツ・オーストリアに留学。東京芸術大学、東京音楽大学等で教鞭をとり、多くのヴァイオリニストを育てる。



美しきイタリア音楽の夕べ

～パガニーニ合奏団高知公演～

宿毛市出身で「四万十国際音楽祭」の音楽監督を長くつとめる山岡耕筰氏が主宰する室内合奏団の高知での初公演。ヴィヴァルディの「四季」など親しみやすい曲や日本の童謡を、山岡氏のお話とともにお楽しみください。

芸術性豊かな音楽を気軽に楽しめる演奏会です。

開催日時　2008年6月20日（金）
18:00開場　18:30開演

会　場　高知市文化プラザかるぽーと大ホール

入場料　全席自由
一般2,500円（当日3,000円）
高校生以下1,000円（当日1,500円）
※未就学児童のご入場はご遠慮ください

木造アーケード完成から十年経過して

山本良喜

はりまや橋商店街の木造アーケードが完成し今年で十年が経過します。

はりまや橋商店街（旧名称・中種商店街）は藩政時代に開かれた県下で最も古い商店街であり、また、アーケードは四国で最初に造られました。そのアーケードも老朽化し架け替えの時期に来て、"既存でないものを造りたい"との商店街全体の希望により、ワークショップ形式の会を開いて専門家から一般の方まで多くの方々に参加していただいて意見を出し合った結果、日本中どこにもないアーケードをという事で、木造にする事に決定しました。

木造のアーケードは全国で初めての試みであり当時は非常に話題となりましたが、建築にあたってはすべてにおいて初めての事でモデルとなるものもなく、強度や消防法等の厳しい規制も多く、構想二年、着工より約一年を費し多くの難問をクリアしながら平成十年の春に完成しました。

完成を機に、それまで長きにわたって親しまれた「中種商店街」の名称を「はりまや橋商店街」に変え、新しい商店街として生まれ変わりました。

はりまや橋商店街の特徴はなんといっても木のアーケードです。高知県産の杉の木をふんだんに使用しています。木は金属と違い柱や梁にしてもいつまでも生き続けていて、そのためか心が癒され気持ちが落ち着きます。また夏は涼しく冬は暖かく感じ、そして適度に音を吸収するため音響がよく、アーケード内でライブを行なった演奏者から必ずお褒めの言葉をいただきます。はりまや橋商店街に来られたらまず天井を仰いでみてください。金属と違い木の良さを感じる事と思います。

もうひとつの特徴は、商店街でのイベントのパンフレット、垂れ幕、飾り付けなどはほとんどが手作りで温みを感じさせるように常に心がけている事です。季節の移り変わりをアーケードのどこかに印しています。たとえばそれは、季節の花であったり歳時記の飾り付けであったりします。来街の折には注意をしてみてください。

アーケードの中では年間を通して数多くのイベントを行っています。ライブであったり、高齢者の集う場であったり様々ですが、それらをいつでもできる場所が商店街の中央にある空き地です。私達が「わくわく広場」と名付けて親しんでいるこの広場を、商店街関係者のみが使用するのではなく外部の方にも広く開放し、互いの親睦を深めています。

最近行なったライブはジャズ、沖縄の三線、ゴスペルなど。特にゴスペルは観客が商店街に大勢詰めかけて、アーケードと融合したすばらしいライブとなりました。また、昨年の父の日には"あの頃君は若かった"のタイトルで団塊の世代の演奏者を募集しフォークソングのライブを行いました。遠くは室戸よりの参加もありマスコミにも大きく取り上げられました。感動のライブであったため参加者から二度目の開催のリクエストが多く、今年の父の日にも行う事になりそうです。

ライブとは別に、定例行事として毎週金曜日に行なわれる「はりまや市」は旬の野菜、果物、海産物を中心に約二十の出店者で商店街が賑わい、街中に買い物の場が少なくなり不便を感じている方々には大変人気があります。普段の日より人出が多く活気に溢れています。商店街の中での街路市は県下でも珍しく、既存の店舗と同時に買い物ができる事で評判もよく、それぞれの店においても売り上げに繋がっていて好評です。

恒例の「木々くらぶ」ではアーケードに歌声が響く

また高齢者が毎月第三木曜日に集い童謡や唱歌を歌う「木々くらぶ」は会が発足して今年で三年目となり定着してきました。現在会員は約二百五十名で毎回七十名ほどの参加があり、演奏会当日はイス、テーブル、PA、照明等の設営を行い、ボランティアの演奏に合わせて合唱をします。屋外のコンサートですから夏は暑く冬は寒い日もありますが、扇風機を構えたりカイロを配ったりと工夫して、天候に影響される事もなく平均的に参加者が集まっています。今年一月には"かるぽーと"の大ホールで「三周年記念コンサート」を行い大きな成果がありました。

毎週金曜日には高齢者を対象に"百歳体操"を広場で行い毎回多くの参加者で賑わいます。そのほかにも商店街全体で高知ファイティングドッグスの選手を応援したり、毎年十一月にはラオスに学校を建設する活動をしている高知商業高校のイベント「ストリートフェスティバル」に商店街全体を開放し資金作りの応援も行なっています。

地域と密着して共栄を図る事で相互の関係を深めたり、居場所の少なくなったお年寄りの集う場所づくりに商店街全体で取り組んでいますが、街づくりに努力する一方で、商店街は今非常に厳しい状況に置かれています。生活移住地の拡散による消費の分散や、規制緩和後の大型店舗の郊外進出等の要因が重なり、物販には厳しい環境となっています。こんな状態の時こそ商店街の重要性を地域社会に知っていただける機会と捉え、期待に応えられる商店街づくりに邁進する必要を感じます。

今春、はりまや橋周辺が整備され、はりまや橋界隈が賑わう環境が整いつつあります。アーケード改築と時を同じくして始まった、はりまや橋周辺の再開発から十年が経過しましたが、現在でも観光の場としての役割を十分に果たしていない状況です。

人が集まり賑わいを取り戻すためにも、魅力ある観光資源を発掘して、その上で、はりまや橋周辺を再整備できれば多くの県外客を取り込む事が可能となります。そのためにはかるぽーとが重要な位置にあります。高知駅、はりまや橋、新しくできたバスターミナル、かるぽーと、はりまや橋商店街と繋がれば無限の可能性を秘めています。この機会を逃す事なく周囲の協力により生かさなければと願っています。

このように色々な取り組みを行なっていますが、自努力を超えたところで商店街は岐路に立たされていて、方向性を間違えれば徐々に疲弊する危機を感じています。そんな中ではりまや橋商店街においては、これからも社会における商店街の役割を認識し、安全で安心な賑わいがあり、家族で来ていただける商店街を目指し努力をしていきます。

（やまもとよしき／はりまや橋商店街振興組合事務局長）

地の名もなき偉人たち⑨

新国劇の創始者 ―沢田正二郎―

広谷 喜十郎

「沢正」の愛称で呼ばれた沢田正二郎は、大正から昭和初年にかけて、「月形半平太」や「国定忠治」など数多くの演劇を上演して、当時の大衆から大喝采を浴び、日本演劇史上燦然と輝く名優だった。

父親は高知市秦泉寺の出身で、明治二十五年五月二十四日に沢正は大津市で生まれた。父親は、尊敬する後藤象二郎のようになってもらいたいとの強い願いから「正二郎」と名付けたという。

父親の死後、家族と共に上京し、開成中学校を経て、早稲田大学英文科を卒業。在学中から島村抱月や松井須磨子の翻訳劇に参加したり、各種の新劇運動で活躍した。大正六年四月に、新しい大衆演劇を目標にした新国劇を創立し、東京で旗揚げをした。それは大失敗に終わり、少人数の座員と共に夜逃げのようにして京阪に行った。苦闘すること数年、独特の殺陣を活用したチャンバラ劇や歴史劇で大衆を魅了し、沢正の名が天下に鳴り響くようになった。同十年、上京して大成功をおさめ、かつての雪辱を晴らした。当初十一人であった座員も百二十人を擁する大劇団となっていった。

新国劇は「半歩主義」と「大衆と不即不離」という主張を掲げ、柳に飛びつく蛙の姿を劇団の旗印とした。

著書には、随筆『蛙の放送』、小説『天明』、漫文漫画『パチパチ小僧』などがある。『パチパチ小僧』からは、きびしい沢正が実は心やさしい人間だったことを知ることができる。その内容は、旅公演に出た沢正が終演後、旅館で二人の子供に漫画入りの手紙を毎日のように書き送ったものを編集したものである。子煩悩ぶりの一端が窺えて、ほほ笑ましさをさそうものがある。巻頭に、漫画家岡本一平が一文を寄せて、「愛の放送の無電として漫画を採用しているのを発見する。甘いパパ丈けでは無い。同時にかしこいパパである」と、絶賛している。

沢正の芝居といえば「国定忠治」などが有名であるが、亡くなる前年の昭和三年に演じた「坂本龍馬」はあまり知られていない。前々から郷土の先人としての坂本龍馬を尊敬していたといわれる。真山青果に、龍馬についての芝居の脚本を依頼していたところ、二年以上もかけて書き上げたという。青果は二回も高知を訪れて、古老から龍馬の人柄を聞き、また東京では史料編纂所などで万巻の書を調べ、彼もまた龍馬に惚れ込み、その理解を深めている。

それまでの龍馬像は、とかく剣豪・英雄としてのイメージが強く打ち出されていた。青果は、龍馬ほど自分の生きざまのなかで、もがき苦しんだ人間はいないとして、龍馬の内面性を探求しようとした。また、龍馬の人間的魅力にも触れて深みのある龍馬像を描きだしている。

芝居は、昭和三年八月一日から三十日間、帝国劇場で上演された。全身全霊を込めた迫真の演技は話題となり、連日大入り満員であったといわれる。樋口十一著『風雲児沢田正二郎』で、「俳優としてこれまでに演ったどの役より、また、どの演技よりも坂本龍馬を抜く出来栄えはなかった」と絶賛している。その後、京都や名古屋などでもこれを上演し、大好評を博している。

沢田正二郎

翌年の二月二十七日、中耳炎に急性化膿性脳膜炎を併発して重態になる。その前日に、「何処かで囃子の声耳の患」と作句している。これが辞世の句となった。

三十八歳の死の間際まで、脳裏に浮かんでいたのは舞台のことばかりであったろう。

三月四日に逝去し、日比谷公園でおこなわれた告別式には約千にも及ぶ花輪がとどけられ、弔者は数万人で長蛇の列ができたという。

（ひろたにきじゅうろう／土佐史研究家）

言葉の現場から⑨

雨よ降れ 大地に降れ

岩井 信子

痩せて乾いたエチオピア西南高地に、唯一育つ穀物は原産のモロコシであるが、その生産性は極めて低い。備蓄はおろか、乾季の終わり頃には人は空腹を抱えている。干魃は即、深刻な飢饉に及ぶ。彼らは日照りの予兆を感知するや、直ちに雨乞いにかかる。

「タンム ハクガー」雨よ降れ。

「ホケ ボラバック ホケ ダンダラ」雨よ大地に降れ、雨よ土を打て。

鉦も太鼓もない。蒼天に聳え立つタマランドの大樹を囲み、男は長い棒を互いに打ち合わせ、女たちは種モロコシの穂を握った両手を差し上げ、天に向かって叫ぶ。少女たちは手を繋ぎ、足首に巻いた鈴束を力の限りに踏み鳴らし、表情が虚ろになるまで叫び踊る。そして「電光よ、地にとどけ」と一際高く声を揃えて雨乞いを結ぶ。

彼らは語る。「タンム ハク ナ マギ バ ナ ラッリ」雨が降り、大地と交わり、人間が生まれる。

タンムはスルマ語で空・雨のことであるが、タンムはまた、男を意味する。バは大地のことであるが、バは女を指す言葉でもある。雨が降ることは雨が大地を訪れて大地と交わること。この営みによって人間が生まれる。タンムとバが交われば木や草、牛も誕生する。つまり、人間をはじめ地上に生きとし生ける命はタンムとバの交わりによって生まれるのだ、と。

少数民族スルマは、族存続のために男が複数の妻を持つ一夫多妻（二～三人）社会である。そして日本の古代社会のように、夫が妻のもとに通う「妻問い婚」である。タンム（夫）がバ（妻）のもとに通い、バと交わる。その営みこそが万物を創造する、と。澄んだ、真剣な眸が、熱を帯びて語る。

土佐の山里の夏のある朝、稲田の傍らの二人の少女の会話。「夕べね、カミナリが五匹落ちたよ」と。都会から祖父母の許へ帰省中の子。「落ちたがやない！ 来たが。カミナリさんは稲の婿さまやき。田んた〈田圃〉へ来たがよ」と村の子。

都会の子の脳裏には、絵本などに描かれた虎や豹の毛皮を纏い角を持つ、鬼の形相の雷図があるのだろう。「落ちた」「五匹」と言っている。一方、村の子の雷は、稲の婿さま。妻に会いに田に降りる…。凛々しい若者像を少女の胸に結ぶ、カミナリさん。

雷鳴をイナムコ＝稲婿、稲の婿と呼ぶ地は土佐に多い。あどけない少女の会話は、都会と山間、それぞれの生活基盤を浮き彫りにして興味深い。

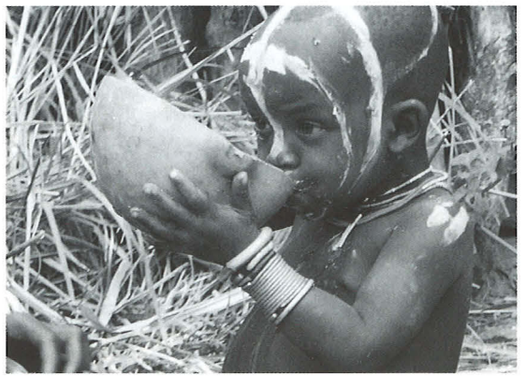
私どもは幼時、雷鳴がしきり、激しい驟雨が軒を打つとき、戸を閉めひっそりと蚊帳の内に籠もった。外を覗き見することも許されなかった。「稲つるび（稲つるみ）じゃから」と。雷は雨になり、田に降り、稲は穂を孕む。「雨が稲に穂を仕込むとき」故に「覗き見はならぬ」のであった。鋭く闇を裂く閃光は稲婿さまの道。あの光で稲婿さまは一瞬にして田に降りる。物音も立てず、蚊帳の内に息をひそめる村の子には、おどろおどろの雷鳴も雨も、幻想的な物語世界への誘いであった。

イナズマは稲妻と書くが、妻ではない。稲の夫、稲夫である。

かって都の貴人たちは、雷を災厄をもたらす禍神と忌み、「くわばら」と避雷の呪言を唱えた。この社会に真の文化は育たない。

雨は雷の化身。雨と大地、タンムとバの交わりが万物を生む、とひたすら雨を乞うスルマ族。雷鳴を豊穣をもたらす「稲つるび」と畏れる土佐の稲作社会。大自然に依拠する暮らしや生産はいつの時代にも文化の母体であるが、そこに生まれでる言葉はまた、時空を超えて不滅の、美しい耀きを放つ。

（いわいのぶこ／民俗・作法研究家）



高知のギャラリー⑤

喫茶 のんた

朝比奈富美男

以前から退職したら好きなコーヒーとアートを組み合わせた喫茶店をやりたいと思っていたところ、私の勤めていた大豊町役場の財政が窮乏し自己リストラする職員が増え、私も平成十八年三月三十一日で退職しました。家内と一緒に何年も前から計画しておりましたので、その年の四月六日に開店いたしました。その日のお客は前の職場の者を含めて八名でしたが、ありがたかったことはこの上ありません。今も一人一人の顔を覚えています。

「喫茶店をやるのは大変だ」と言われながら、私の好きな美味しいコーヒーと良いアートで、くつろげる空間を提供したいと思います。今まで良いお客様と、快く協力してくださる作家に恵まれ順調に三年目を迎えました。

絵画、版画、書道、写真など延べ三十三名の個展と三つのグループ展を行いました。どの作品も作家が歩んできた人生と生きるエネルギーを表していると思います。お客様からは「癒される」「元気をもらった」「やさしくなれる」「人生が変わった」などの反応がありました。もちろん、「うまいだけでは…」「何を言いたいかわからない」「前の作品がよかった」「個性がない」など、厳しい意見もありました。また最近では、再び利用してくださる作家もいます。ありがたいと思います。作家の変化が見られていいものです。

人の創ったもの、特に個性的なものには、作者の人間性が現れていると思います。コーヒーを飲みながら自分の経験で自由に作品を鑑賞し、時には熱く芸術論をたたかわせる場になればと思います。『のんた』で見た絵が頭に残っている」「あの写真を見て心が揺さぶられた」ということになればうれしいと思います。

また毎月、私達夫婦も参加して、『ホトトギス』の岡林知世子先生を招いて夏草会と土筆会という句会をしています。感動と心情を五七五に託して表現することは、生きている証となると思います。

このように喫茶店という場でやれる文化的なことは、私自身も参加してどんどんやりたいと思います。ぜひお越しください。

私は下手の横好きですが、洋画、版画、立体、イラスト、彫塑、写真を趣味としていますので、展覧会を通じてアートに対する色々の考え方を知り、非常に勉強になります。また、来店してくださるお客様の人生の一端をかいま見、考えさせられます。

「『のんた』とはどういう意味？」とよくお客様に聞かれることがあります。山口県の方言で語尾へ付ける意味のない言葉ですが、昔から消えずに残っています。時代が変わり人の心が変わっても変わらずに残る。それは人間の本質をついた優れた芸術作品に通ずるものがあると思います。

狭い喫茶店ですので手軽に展示できます。一階のメイン壁面は六メートルです。二階も利用できます。展示に必要な金具など準備しています。ご利用は無料ですが作品を収集したいと思い一点いただいています。これらの作品はやがて繰り返し展示したいと思います。会期は一か月間、水、木曜日は休み、時間は午前七時から午後五時です。お気軽にご利用ください。

今後の展覧会の予定は次のとおりです。

平成二十年
五月　伊沢寿子洋画・吹きガラス展
六月　葛目結・山崎晴奈展
七月　岩崎茂久写真展
八月　山本啓三洋画展
九月　田島栄洋画展
十月　吉岡義一書道展
十一月　前川通泰展
十二月　佐竹茂洋画展

（あさひなふみお）

喫茶のんた
高知市大川筋一丁目七―二八―二
ダイアパレス大川筋前
TEL〇八八―八七五―四八〇八

高知市文化プラザ かるぽーと 3月の事業のご報告

第24回写真コンテスト・高知を撮る 入選作品展

3月18日から23日にかけて、「第24回写真コンテスト・高知を撮る 入選作品展」を開催しました。

このコンテストは、過去から現在に至るまでの高知の風景や出来事、人々の暮らしを写真で記録し、高知の様々な表情を伝えるとともに、未来の高知のあるべき姿を考えていこうというものです。高知に関する記録性のある写真を扱った「記録写真」部門と、撮影者のお気に入りの高知の風景や風俗を撮影した「I LOVE 高知」部門の2部門に、今年度は95名の応募者から合わせて276点の応募がありました。

会場には、各部門の特選2点、準特選16点を含む入選作品62点が展示され、熱心に作品に見入る鑑賞者の姿が多く見られました。

アーティストバンクプログラムvol.8　ライブ パレット 吉井美賀ピアノリサイタル

3月18日、高知市文化プラザ小ホールで、当事業団の運営する県内アーティストの人材バンク「アーティストバンク」登録者による公演、「アーティストバンクプログラム」を開催しました。8回目となる今回は、ピアニスト・吉井美賀さんのソロリサイタルでしたが、日頃から幅広い演奏活動を行っている吉井さんの公演ということで、会場はほぼ満席となり、これまでの「アーティストバンクプログラム」で最多の集客数となりました。

公演は二部構成となっており、モーツァルト、ショパン、リスト、ドビュッシー、スカルラッティといったクラシックのピアノ曲7曲が演奏されました。観客がピアノの音色だけに聴き入ることができるよう、司会を排したシンプルな構成でしたが、吉井さんは確かな技術と豊かな表現力で90分間を弾ききり、聴衆を魅了しました。

高知を撮る

第24回写真コンテスト入賞作品

鰹一本釣三人娘

（平成19年　久礼漁港）

森田　清一

「かつお祭」での三人の娘さんの健康で明るくほほえましい姿に、漁業の発展を祈る。

「学び」

風俗歳時記

「すっごい驚くと思います。心の準備はいいですか?!（笑）

実は……4月7日付けで社会人生活にピリオドを打ちました。ホテルを退職しました！　で、翌日4月8日より看護学生としてスタートを切りました」

高知大学を卒業して丸四年になるTちゃんからのメール。彼女は「仕事はホテル」と言い切り、長く厳しい就職活動をガッツで乗り越え、東京の老舗ホテルに就職した。就職相談員の仕事もしているわたしは彼女の熱い思いに打たれ、ホテルに勤めるわたしの弟を訪ねて、一緒に宮崎に旅したこともある。

去年、東京出張の折に会った彼女は、落ち着いた美しい女性に成長していた。「出世したら、Tちゃんのホテルに泊まるからね」と言ってたが、その時すでに秘めたる思いがあったとは……。

老舗ホテルも修行の毎日だったはず。やっと一人前になったかなと思うところで、また学びからスタートさせるという。お客さまの「くつろぎ」をもてなすホテルと、患者さんの「命」に向き合う病院、どちらも究極のホスピタリティが求められる。三年以内の離職率が大卒では三割と言われるが、彼女の場合、「離職」と言うより、ホスピタリティの向かうベクトルが変化したのかな、実は彼女の深いところにある「思い」はつながっているのかな……と思う。

わたしの"出世"を待ってくれず、かの老舗ホテルに泊まる目的を失ったのは残念だが、彼女の新しい出発を心から応援したい。

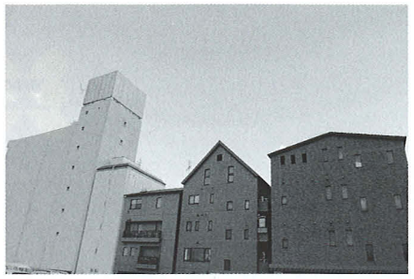
「Tちゃんの決意の後ろにある『思い』をじっくり聞きたいな。今度、東京に行ったら、ごはんおごるから。実は、わたしも四月から『学生』なんですよ。大学院に入学しました。『学生』仲間として、お互い、頑張りましょう」

こう返したわたしのメール。彼女も、すっごい驚いたかもしれない。

（日向夏）

景観考

タケムラナオヤ



裏の景

表を飾れば飾るほど、裏は寂しい。この写真は、高知駅のすぐ横の空き地で見かけた裏の景。いずれはこの手前にも某かの建物が立つはずだけど、今はこの通り裏が駅から丸見え▼しかも意匠も色も形も揃ってバラバラ。なんでもかんでも色や形を合わせたらいいという訳ではないけれど、ここまで違うと痛々しいのだ▼人間なら背や裏には色香がある。街だって、ホントは裏がよっぽど深い。だけど、今のまちづくりでは、通り沿いの"表"を揃えてお化粧することばかり必死で、"裏"には思いが至らない。そもそも、裏をつぶすことこそ"まちづくり"だとでもいうべき状態だ▼この風景、いずれは隠れて見えなくなるのかも知れないけれど、高知の玄関口にある光景としては、ちょっと寂しい。

風俗

畑のおばあさん

私の通勤コースは高知駅前再開発で再区画されて道路も家も新しくなり、すっかり昔の面影がなくなった。似たような家が建っている真新しい町には魅力を感じないが、そんな住宅に囲まれてそこそこの広さの畑がある。畑には季節の野菜や花がいつも植えられていて、ある畑に

はいつもひとりで世話をしているおばあさんがいた。おばあさんはだいたい私の出勤の時間くらいに畑に来て、いつも黙々と野菜や花の手入れをしていた。

町が新しくなってから季節は二回目の秋が来て、並木の葉っぱが落ちてしまった頃、そのおばあさんは畑に来なくなった。

最初はあまり気にしなかったが、そこを通るたびに、主の居なくなった畑はしだいに荒れていった。畑はフェンスで囲まれていて一カ所だけ入り口がある。その近くに畑の世話をする道具やさまざまな袋がいつまでも置かれていて、昨日おばあさんが来て置いていったように、なにも変わりがなかった。

おばあさんはいったいどこへ行ってしまったのか。病気で入院したのだろうか。それとも、もう一年を過ぎているので亡くなったのかも知れない。高知市街では県外に就職した子どもの両親が年老いて亡くなった後は、平地の駐車場になることが多いようだ。そんな駐車場が住宅地のあちこちに歯が抜けたような奇妙な風景をつくっている。この畑もいずれは駐車場になるのだろうかと心配をしていた。そして、しばらく見なかったその畑は、やはり舗装されて立派な駐車場に変わってしまっていた。

（霖）

第155回 市民映画会

4分間のピアニスト

自由をつかむために彼女に残された演奏時間は、たったの4分間だった――。

© 2006 KORDES & KORDES FILM GMBH/SWR/BR/ARTE

ディスタービア

リセット不能の覗き見ゲーム――
アンリミテッド・ショック・スリラー！

© 2007 Dream Works LLC and Cold Spring Pictures. All rights reserved.

と　き：6月26日㈭・27日㈮
ところ：高知市文化プラザかるぽーと大ホール

上映時間（両日とも）	
4分間のピアニスト	①11:40 ②15:40 ③19:35
ディスタービア	①13:45 ②17:45

料　金：一般前売り1,300円（当日1,500円）
割引（前売り・当日とも）1,000円
※学生証、長寿手帳、障害者手帳などをご持参の方は割引料金
※前売り券は、かるぽーとほか市内各プレイガイドおよび指定のサニーマートで販売
※お問い合わせ：（財）高知市文化振興事業団
企画事業課　088-883-5071

今号の表紙

「opus」

島村　悠

作品タイトルは「（音楽の）作品、著作」という意味です。

作品について描く者としてはあれこれ考えるのですが、その思考が観る人に向けて何かメッセージになるかというと、案外そうでもないように思えます。

観る人にとって単純に良い絵（作品）であるか、この部分で作品を見ていただきたいと思い、このタイトルにしました。

（しまむらゆたか／高校講師）

文化高知 No.143 [隔月発行]
2008年(平成20年) 5月1日発行

財団法人 高知市文化振興事業団
〒780-8529 高知市九反田2番1号
TEL(088)883-5011(代表)/郵便振替01680-5-14869

第60回 高知市展

THE ART OF KOCHI 2008

出品

●搬入日時
2008年5月18日(日)19日(月) 午前9時▶午後5時

●搬入場所
高知市文化プラザ かるぽーと
7階市民ギャラリー

●出品料(1部門)
一般/1,500円・学生/1,000円

アンデパンダン INDEPENDENT 公募・無審査展

FEEL FREE TO ENTRY.

絵画(洋画)
日本画
書道
先端美術(立体)
彫刻
陶芸
工芸
写真
ペン字
デザイン

■開催日時
2008年 5月24日(土)▶6月8日(日) [ただし、月曜日は休館]
午前9時▶午後7時 初日は午前10時開場、最終日は午後5時で終了です。

■会場
高知市文化プラザ かるぽーと 7階市民ギャラリー

■入場料
前売300円・当日400円
長寿手帳・療育手帳・精神障害者保健福祉手帳・身体障害者手帳所持者及び高校生以下は無料

■お問い合わせ
(財)高知市文化振興事業団 企画事業課 088-883-5071

■主催/高知市展代表委員会・(財)高知市文化振興事業団・高知市教育委員会
■共催/高知新聞社・NHK高知放送局・RKC高知放送・KUTVテレビ高知・KSSさんさんテレビ

デザイン:山本達也

かるぽーと